

建生修理屋さん



手や片足が取れている人形が山積みされた店内。アンティーク人形の売買もしているアービングさんの店（レキシントン街61丁目）

証つき
人形や
のもの

ニューヨーク・ドール・ホスピタルを経営するアービング・チェイスさんは、父の代からの「人形修理人」。

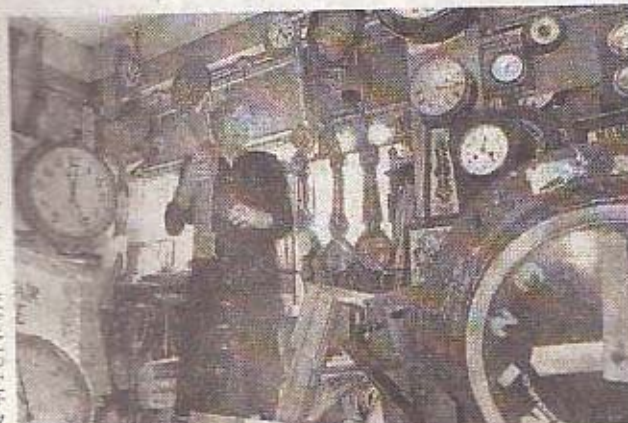
一九〇〇年創業というから、一世紀近くも人形にかかわってきたことになる。足の踏み場もないほどの店内には、どこかが欠けた人形がうすたかく積まれており、棚に並んでいるアンティークの人形は、思い思いに甫を見つめている。

アメリカ人にとって、人形はなくてはならない存在だ」といふ。それを実証するように、一日平均四十人から五十人の客が修理を依頼に来る。

「おとこに人形を修理するアービングさんは、時々、私たちが方を振り向いて、人形が片目をあぐり



45年前、息子に買い与えた当時人気のジェリー・マホーニィを修理に来た客（右）



アンティーク時計修理屋を始めて35年のケイさん。「私はもう80歳だし、時間がないんだからあまり客に来てもらいたくないんだよ……」

「おとこは、ワエスト・ビルラジの中心地。サクソホンとラルートの修理屋の主人、道原トクダシ・リックさん（右）は、自らギター、フルート、サクソホンを演奏する音楽家でもある。かつて、バンドと演奏旅行をしたこともあるという。ライフルのパーツ製造会

ほとんどのサクソホン（右）は、父親のころから使っているのだが、修理はほとんど自分で返すことが多いんだ。でも、彼は売れないうちに修理屋に持って来た。仕事の後、おとこの客や友達に音楽を演奏したりおしゃべりをしにビルラジを持って帰るといふことは、まるでにぎやかなパーティーのよ